国内研修報告書

・テーマ：徳島県 海陽町における 地域での防災活動の取り組みについて

・研修先：徳島県海陽町

・期間：2024 年 8 月 7 日～8 日

・参加人数：4 人

徳島県海陽町国内研修

研究の目的について

徳島県の海陽町という地域で平成２５年に行われた宍喰中学校防災キャンプの運営をされた方々へのインタビューを軸に海に面する地域の防災について８月７日（夜行バスを利用して夜間に移動）～８月９日に実際に現地に足を運んだ。なぜこのテーマを選んだのかというと３０年以内に７０％～８０％の確率で南海トラフ巨大地震が起こると予測されており、更に防災意識を高める必要があると考えていた。そして、海に面しており南海トラフ巨大地震の影響を受ける事が考えられる徳島県を見つけ、約１０年前に宍喰中学校で行われた防災キャンプの運営を行われた事が地域の記事によって知る事ができた。そこで１０年経った現在、インタビューする事で現在と過去の防災教育や防災活動の違いについて明らかにしたいと思ったからだ。

海陽町の地理と防災リスク

徳島県海陽町は、徳島県の最南端に位置しており、北部、西部にあたる山地は１０００メートルにおよぶ緑豊かな山々がそびえている。また、海岸は室戸阿南海岸国定公園に指定され、海岸はリアス式海岸となっている。自然豊かな地域であるが太平洋に面しており南海トラフ巨大地震が発生すると津波高１６ｍ津波到達時間が第１波６分、最大波４４分が想定されている為、地震が起きた際、特に迅速な対応が必要であるといえる。

東部防災館の視察

８月８日に海陽町の役場の方とのインタビューの前に訪問した場所は東部防災館　おきのすインドアパークという場所だ。徳島駅からバスで向かえアクセスも良い場所に位置しており、途中徒歩で移動していると一見川のように見えるが海水の臭いのする河川敷を通過し、改めて海が近い地域だと感じた。東部防災館は、本来視察のみを考えていたが急遽職員の方にインタビューする事が可能となった。東部防災館は、災害時には物資の輸送拠点として機能する。輸送拠点を決め分配する事で報道の多い地域に物資が偏るのを防ぐ事ができる為、このような拠点が誕生した。また、普段は地域のにぎわいづくりの場として機能しており、未就学児から社会人のスポーツサークルなど様々な世代の方がいる事が分かった。本来東部防災館のある場所は、工場地区の新聞工場の跡地が県の方に寄贈され、委託という形で民間が運営している施設である。新聞工場の空間が大きいという点を活かした場所づくりをしている。例えば、天井の高さが必要な体育館や習い事や趣味を行う場所である DEKITA では、講演会、子ども会、阿波踊り、オペラなど他の地区センター等の施設では珍しいアクティビティを行えるようになっている。カフェコーナもあるが元々入っていた業者の人員不足から入れなくなっており現在は、キッチンカーが日替わりでくるようになったそうだ。普段は防災館の役割よりも地域の人が屋内で遊べる場所を提供する役割が強いそうだ。東部防災館を視察・取材を行い、民間の企業に委託する事により今のトレンドを取り入れたコンクリートと木材を貴重としたつくりになっていた。他にも、カフェが人員不足という事から新しい施設でも人員の問題がある事が分かった。はじめ、防災館で輸送拠点という情報であると聞き、倉庫があり多くの備蓄があると考えていた。しかし、輸送拠点という事で実際に支援物資が来た時に受け入れられるようにしており、それ以外の期間では様々な世代の人が関われるというのが防災館という役割以外にも地域の方々が日常的に利用できる場所を提供している事に関して改めて興味深く感じた。

研修中に遭遇した地震の影響について

東部防災館への視察を終え、海陽町の役場の方にインタビューを行う場所である海南文化館近くのゲストハウスに宿泊する予定であったが九州地方で生じた地震及び、交通機関の運休などの影響により、役所の訪問が不可能となってしまった。徳島自体

は、震度１であったが海が近い為近くの地方で地震が発生すると地震自体が小さい地域でも津波の危険性がある事が改めて分かった。他にも交通機関が乱れると都会では別の路線を変更する事で遅延を回避する事が多いが徳島では目的地まで JR の１本であった為、その後どのように行動すればいいのか定めるのが厳しいと感じた。また、宿に関しても元々取っていた宿にたどり着く事が交通手段上困難となった為、新しい宿を探したが他の観光客も同じような方な状況の方が多い影響もあり、中々宿を見つける事ができなかった。そして食に関してもより美味しく温かいものを被災者に提供する事でメンタル面でのケアができると感じた。実際に地震の影響を身をもってしり改めて冷静に一つ一つ目の前の問題に対処し、判断していく必要があると気づいた。その後、無事宿に泊まる事ができ、バス、電車、新幹線などを利用し、帰宅する事となった。

防災キャンプについて

スケジュールを立て直し、９月２６日に本来実施するはずであった海陽町役場の方へのインタビューを zoom にて行った。海陽町役場の方からそれぞれ防災キャンプの概要、食事メニュー、アンケートの結果などをいただく事ができた。防災キャンプは平成２５年８月１９日～８月２１日に行われ、宍喰中学校の中学１年生や防災会、婦人会、自衛隊など多岐に渡る協力の元、約５０名で実施された。キャンプでは実際に避難所で寝泊まりをしたり、非常食を食べたり、夜間時に避難する練習、南海トラフに関する講演が行われアンケートによるとおおむね満足を得たそうだ。このキャンプにより、生徒たちは、防災について改めて考え、どこに逃げればいいのかなど災害時に必要とされるスキルなどを学ぶ事ができたといえる。改善点としては避難所生活は地域住人が主体となって行う必要がある為、訓練方法の見直しが必要だと感じたそうだ。また、避難所生活をする子ども達が二日目になるとストレスが溜まっているように主催者側から見えたそうで、実際に生徒のアンケートからもそのような意見が寄せられている事が分かった。また、このキャンプは、東日本大震災を受けて、大規模に防災に関するイベントを行う必要がある為、現在では徳島県で行われているキャンプと海陽町独自の取り組みよして学期に１回の非難訓練、防災の日を設ける、防災に関する講演、津波避難訓練、登校時間帯や夜間に避難訓練などを行っているそうだ。しかし、年々、避難場所への集合時間が長くなってなり、防災関連のイベントも縮小傾向にあるのでこの状態で災害が発生するのではないかと不安の声もある事が今回の取材で明らかとなった。今後行いたい事としては地域アプリを導入して被災者の位置情報などが分かるようにするなどデジタル技術の導入もしたいという事が明らかとなった。今回のインタビューを通して、海の近い地域では私が住む地域より防災意識が高い事が分かったが巨大地震がしばらくないと危機感が薄まってしまう為、改めて南海トラフ巨大地震への警戒度が高まりつつある今、防災に更に力をいれていく必要があると感じた。また、避難所生活を行うとどうしてもストレスがたまるという事が実際に話を聞き明確となった為、以前大学の講義でお聞きした体育館に段ボールで仕切られた空間での避難生活を改善すべきという考えの重要性が改めて分かり、地震が来る前にどのように整えていくか今後考えていきたい。海陽町については現地に足を運べなかった為、機会ができたら実際に訪問したと感じた。

改めて東部防災館の方、海陽町の役場の方々、ご協力ありがとうございました。

引用

海陽町役場,2022,「海陽町プロフィール」,海陽町ホームページ,(2024 年 9 月２８日取得, https://www.town.kaiyo.lg.jp/docs/2011041300538)